千葉大学法政経学部同窓会会報

第32号

2026年3月 発行

ご挨拶・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.1
同窓会からのお知らせ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.3
クローズアップキャリア・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.5
祝・司法試験合格・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.8
千葉大学・法政経学部トピック・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.10
同窓会役員紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.11

あきらめない

千葉大学法政経学部同窓会長
渡辺 雅隆

ミラノの冬季オリンピックは、ウインタースポーツに縁のない私のような者にも大きな感動をもたらして閉幕しました。史上最多の24個のメダルばかりでなく、選手たちは記憶に残る言葉も残してくれました。フィギュアスケートの「りくりゅう」ペアは「本当に私たちから伝えたいのは、どんなことがあっても絶対諦めない気持ちを持つこと」。スノーボードの深田茉莉は、予選7位からの逆転で頂点に立ち「悔しくていっぱい泣いたけど、あきらめずにやってきてよかった」と語りました。まだ19歳ですが日本の冬季五輪史上最年少金メダリストの言葉は胸に響きます。ふと、松下幸之助や稲盛和夫も「成功するには最後まであきらめずにやりぬくこと」と語っていたことを思い出しました。

ミラノ五輪が開幕した直後、国内では総選挙が実施されました。年明け早々にざわざわとした空気になり、あっという間に衆議院が解散。初の女性首相は「高市早苗に国家経営を託していただけるのか、ご判断を」「（解散は）内閣総理大臣として決断した」と意気軒高でしたが、批判の声もあがりました。「7条解散」を容認する立場にたっても、解散の決定権を持つのは「内閣」であり、「総理大臣」ではありません。首相としてまだ何もしていない時期に、国家経営を託せと迫られてもなあ、という声も聞こえてきました。急ごしらえの「中道」は、訴えを説明する時間もないまま惨敗。自民が戦後最多の316議席を確保した結果をみれば、高市首相の戦略が当たったのでしょう。

衆議院の解散が告げられると議員たちは万歳をします。学生時代、憲法は尾吹善人教授でした。その教科書に国会解散のくだりがあり、「なぜか万歳をする」と書かれていたことが、妙に記憶に残っています。その瞬間に失職する議員たちが「万歳」を唱和するのは確かに不思議です。今回は野党議員の万歳こそありませんでしたが、使われた税金は800億円余り。一昨年10月の総選挙の費用は約730億円。本来なら4年任期のはずなのに、1年4カ月でざっと1500億円が消費された計算です。議員定数を1割減らすと与党は言いますが、その程度ではとてもまかなえないし、「民意」の「削減」につながりかねません。

選挙後、第2次高市内閣の発足を告げる朝刊1面に、5段見出しで「辺野古より長い滑走路がなければ『普天間返還せず』」という記事がありました。米国防総省の見解が判明したそうです。国土の0.6%の広さしかないのに、日本にある米軍施設の7割が集中する沖縄。普天間、嘉手納という巨大な米軍基地を抱え、オスプレイなどの軍用機が飛び交います。危険を避けるために普天間基地の返還を訴え、海岸線の辺野古に機能を移す計画を政府が打ち出して30年。マヨネーズ並みの海底地盤が見つかり工期はさらにずれ込むとみられます。基地縮小を訴える県民の声

を聞かずに「安全のため」「唯一の選択」と説明してきた政府はどうするのか。1年前、日本語教室のボランティア仲間で沖縄を巡りました。辺野古の埋め立てに反対する人たちが座り込みを続けるテント下に「勝つ方法はあきらめないこと」と看板がありました。ともすれば「どうせ・・・」と考えがちななかで、心を奮い立たせているに違いありません。

この原稿を書いていたら、また、とんでもないニュースが飛び込んできました。米国とイスラエルがイランへの軍事攻撃を開始し、最高指導者のハメネイ師を殺害しました。核兵器をめぐる対応などイランへの批判は当然としても、差し迫った危機がなく、協議も進むなかでの攻撃は「暴挙」です。すぐに反応したのがウクライナへの戦争を仕掛けたプーチン大統領。「人間の道徳や国際法を踏みにじった」と哀悼の意を表明したそうですが、米国も含めて大国の手前勝手な理屈は目に余ります。政府はどんな対応をとるのでしょう。

衆院選をテーマに興味深いネット意識調査がありました。自らの政治的立場を左寄り（リベラル）と自認している人の投票先は40代以下だと自民党が最多でした。年代別に見ると、10～30代では右寄りが30%、中間が32%、左寄りは13%。ほかの世代と同様に中間が多いことやネットに絞った調査だったとはいえ、その理由は何なのか。護憲、平和、多様性や自由の尊重等々、リベラルの意味するところや受け止め方に違いがあるのかもしれませんが、それでも気になる数字です。千葉大で学ぶ学生たち、とりわけ法律、政治、経済を総合的・俯瞰的に学んでいる後輩たちはどうなのでしょう。社会は課題解決力を持つ若者を求めていると言われます。しかし、本当に必要なのは、実は課題を見つける力です。いまに満足したら、課題は見えません。満足して欲しくない、「どうせ」と考えないでもらいたい、諦めて欲しくないと強く思います。

昨秋の同窓会総会は橘永久・法政経学部長にお越しいただき、お話をお聞きしました。終了後にはキャンパス内のアエレカフェで小さなパーティーも楽しみました。現役の学生さんも顔を見せてくれて、異業種交流のような時間を過ごし、今後の同窓会のありかたについてもアイデアを出し合いました。今年も総会は巡ってきます。今後ともご支援をよろしくお願いします。

令和7年度 同窓会総会・懇親会を開催しました

2025年11月9日（日）に法政経学部同窓会総会を開催いたしました。令和6年度に引き続き、対面・オンライン合計で29名の同窓生が参加し、橘学部長による講演の後、令和6年度決算、令和7年度予算案について原案の通り承認されました。

また、総会終了後には、西千葉キャンパス内の「アエレカフェ」にて懇親会を開催し、24名の同窓生が参加しました。

懇親会では、法曹界、行政、ビジネスなど、多種多様な分野の第一線で活躍する卒業生たちが、それぞれの業界の最新動向や近況について熱心に情報交換を行う姿が見られました。世代を超えて共通のテーマで語り合えるのは、まさに本学部の幅広い学びの賜物といえるでしょう。

また、今回は現役学生も参加されていて、社会で活躍する大先輩たちの体験談に熱心に耳を傾けていました。これからの進路に悩む学生に対し、卒業生が自身の経験に基づいた温かくも力強いアドバイスを贈っていました。

終盤では、再会を誓い合いながら連絡先を交換し合う姿も見られ、かつての学友との縁を深めるだけでなく、新たなネットワークが生まれる活気ある締めくくりとなりました。

今回残念ながら参加できなかった皆様も、ぜひ次回の機会に、懐かしの西千葉キャンパスへ足を運んでみませんか。

キャリア形成支援情報提供サービスについて

在学生に向けたサービスとして、同窓会ウェブサイト上に卒業生の体験談やメッセージを掲載する『同窓会の先輩方からの在学生の皆さんへのメッセージ』を掲載しています。

ここでは有志の同窓会員に協力いただき、在学生へのメッセージとしてご自身のキャリアや学生時代のエピソードを掲載しています。

１年次の学生には所属するコースの選択の参考に、２年次以降の学生にも自身の就職先や進路について考える際の一助になればと考えています。

メッセージは今後も募集しておりますので、もし提供いただける方がいらっしゃいましたら、同窓会事務局まで是非ご連絡ください。

走り続けたい

会計検査院
第2局厚生労働検査第1課　調査官
伊東　雅子
（1988年 法経学部法学科 卒業）

なぜ法学科へ？

文学部志望だった私が千葉大に入学した1984年（昭和59年）当時は、バブルで就職状況は超売り手市場と言われていましたが、文学部の女子は依然、就職は厳しいとの見方が根強くありました。法学科の方が仕事の選択肢が広そうだし、文学と異なり、これまで学んだことがない点もまた魅力に感じました。両親とも会社員、特に母が景気と天候に左右される服飾業界でデザイナーとして苦戦する様子を目にしていたので、卒業後は安定して働ける所が良いと漠然と考えていた気がします。

なぜ千葉大へ？

高校の同級生の多くは浪人して更に上位の大学を狙っていたため、私も一浪して都内の大学を目指そう！と思いましたが、我が家の経済事情では、浪人はNG。年の近い姉妹がいて学費が掛かるので、お前は現役で自宅から近い千葉大へ、との両親の願いはもっともでした。

しかし、その点が千葉大ではなく、都内の大学を希望した最大の理由でもありました。高校でさえ電車を乗り継いで通学していたのに、千葉大なら最寄り駅からたった2駅。余りにも近過ぎたのです。

入学後も、ロケーションへの物足りなさと、現役では希望する都内の大学に届かなかった自分の勉強不足をひたすら痛感し、後悔する日々。このまま家と大学とバイト先をただ何となく行き来する生活が続くのか…と気持ちが暗くなった12月のある日の夕方、当時50才だった父が職場で倒れ、深夜に亡くなりました。

父の突然の死にショックを受けながらも、ハッと気付いたのは、浪人しなくて良かったんだ、ということでした。母に同行して父の職場へ挨拶周りをした際、「お父さんは、娘が現役で千葉大に合格したと、とても喜んでいましたよ。親孝行ですね」と職場の方に声を掛けていただいたことも、初めて自分を肯定できるよすがのように感じられ、そっと背中を押された気がしました。

父の死をきっかけに、自分の学ぶ大学にもっと積極的に関わろうと考え、地の利を生かして、もっとたくさんバイトもやろう！と前向きな気持ちに変わったことを思い出します。

なぜ会計検査院へ？

在学当時、法学科は卒論が必須ではなく、その理由は、司法試験や公務員試験に向けた勉強を奨励しているためと聞きました。卒論の代わりに国家公務員試験を受けることにした私ですが、試験に合格後、さて、どこの省庁に就職するかと考えたとき思い浮かんだのは、中学の社会の授業で、憲法上の独立機関と習った会計検査院でした。

憲法（第90条）に規定された組織であれば、国がひっくり返らない限り検査院の地位は安泰だろうし、政策を立案し事業を執行する他省庁

に比べたら地味だけれど、国家財政を監督するのだから、非常に重要な役どころではないか。しかも、国の資金で事業が正しくムダなく効果的に行われたかなどを検査するため、国内外に出張するとのことで、調べ物や旅行の好きな自分には、まさにピッタリと感じたのです。

当時は、均等法の施行3年目で、女子学生の就職状況は依然として先行き不透明でしたので、検査院の憲法に規定された安定性と社会への貢献度に人生を掛けてみようと思いました。

検査の現場

検査院のアピールポイントの一つは、採用1年目から活躍できるチャンスがあることで、検査のための出張で問題点を発掘し検査報告に向けて提案する作業は、1年目の新人でも、20年目のベテラン調査官でも横一線です。

検査院の英語表記がBoard of Auditとあるように、検査は相手の話をよく聞くこと、Auditが基本です。話を聞き、なぜこういうやり方をしているのだろう？とか、同規模の事業で前に検査した所より費用が高いなと思ったら、その理由や積算根拠についての説明を求めます。その事業に精通した相手が行った中から、問題はそう簡単に見付かるものではありませんが、時に先方も想定しなかったことが突破口となり、問題点に辿り着く場合もあるのは『灯台もと暗し』。前例や慣習にとらわれない第三者ゆえのフラットな視点と柔軟な発想、また、多くの現場を見て横並びで比較できることも、検査院の調査官の強みといえそうです。

検査する事項や対象は、検査院が主体的に選定して行うほか、国会法に基づき国会から特定の事項について要請を受けて行う場合もあり、私が若い頃に担当した最も印象深い案件が、この『国会からの検査要請事項』です。国と特定の公益法人との不透明な関係が問題視されていたことを背景に、国会から公益法人の財務状況等についての検査要請があり、2009年（平成21年）、各府省が所管する約6,600法人の内部留保の状況や、国のOBの再就職状況等の検査結果を国会に報告しました。当時の公益法人制度改革を後押しし、インパクトがあったと感じた案件でした。

検査は、相手の職場に検査院側は少数か一人で赴くことが多く、数十人の相手を前に孤軍奮闘、限られた時間でとことん調べ、確認しなければなりません。検査院に指摘をされたくない相手と、丁々発止、喧々諤々の議論に発展することも多く、検討を重ねた結果、相手も了解した内容が検査報告に掲記されます。

新人の頃は、自分のような若い女性が検査に来たということで、態度を硬化させる相手は珍しくなく、こちらが何を質問しても沈黙が続くか、逆にケンカ腰になられて議論が噛み合わず、途方に暮れたこともありました。しかし、どれほど敬遠され、厳しい場面に遭遇しても、税金の使われ方や事業の是非を確かめることは、国民に代わり誰かが責任を持って必ずやらねばならない、それが検査院の調査官の使命と考え、途中で諦めることなく続けてこられたと思います。

サポートを得て

検査のための出張が多い点は、独身時代は変化に富んで面白く思えても、結婚し家庭を持つと、一転して大きなネックに感じられます。最盛期にはひと月の半分、家をあける状態が半年程続く場合もあり、私と同じ頃に採用された女性職員の多くは、出産や子供の就学を機に退職してしまいました。

何としても辞めずに頑張りたいと考えた私の

支えは、検査に対する使命感とともに、家族や職場の理解だったと思います。出張時に子供が急に発熱すると、母は常に真っ先に駆け付けてくれましたし、人事担当は、小さい子を残して立て続けに地方出張するのは大変だろうと、日帰り出張が多い課への配置換えを認めてくれました。また、学童の閉所時間が早く、短時間勤務制度もなかった当時、子供を迎えに行くため毎日有休を使って早退させてほしいと願い出たところ、上司は「伊東さんが休むためではないのだから、有休を使うことはない。堂々と早退してください」と励ましてくれたのです。

仕事と家庭を両立できたのは、これら数々のサポートのお陰であり、子育てしながら働く女性調査官のファーストペンギンとして、何とか向こう岸まで泳ぎ切ることができた思いでいます。

嬉しい出会い

15年ほど前、人事担当を通じて千葉大から就職説明の依頼があり、同じ千葉大卒の若手の女性職員とともに、けやき会館に赴いたことがあります。それから数年後の2014年4月、思い掛けず、とても嬉しいことに遭遇しました。当時の私の説明を聞いて、是非検査院で働きたいと希望した女性が無事採用され、私に報告に来てくれたのです。

私の説明で最も彼女の心に響いたことは、どの組織にも改善すべきと考えられていることはあっても、自浄作用は働きづらいもので、法律に基づく検査院の指摘によって改善を図ることができれば、当初は相手と意見の相違があったとしても、結果的には「改善できて良かった」と相手からも理解が得られる。そういう仕事ができる調査官になりたいという内容だったようです。

彼女は現在調査官として活躍中ですので、私も今一度そのことを思い起こし、相手からも理解の得られる検査を心掛けたいものです。

今、これから

2025年12月末で、かつて若い頃にお世話になった課の課長を役職定年しました。2人の子供も成人し、家庭の制約がなくなったので、2026年1月からは、再び調査官として全国各地に出張し、検査の最前線でもうひと頑張りというところです。

これまでをふりかえると、心身ともに健康で息長く仕事を続けるには、余り根を詰め過ぎず、適度に気分転換を図るとともに、視野を広げる意味でも、組織内外の多様な人と交流することがとても大切と感じています。同じ法学科卒の友人達とは、進んだ道も境遇も皆それぞれですが、卒業から40年近く経った今でも親しく付き合っていますし、在学時は話したことがなかったけれど、就職後かなり経ってから、千葉大つながりで交流するようになった人も何人かいます。

職場稽古の華道では、昨年ようやく師範の免状を取得でき、体力作りと地域参加を兼ねて50才から始めたソフトボールの方は、なかなか上達しませんが、打って走って仲間との乾杯は、理屈抜きに楽しく、毎回笑いが絶えません。

検査院を退職した後のプランは、まだ漠然としていますが、生涯を通じて社会と関わり続け、一番学びたかった文学にも取り組んでみたい。人生のゴールに向かって、今後もマイペースで走り続けたいと考えています。

司法試験　合格おめでとうございます！

レイ法律事務所　弁護士
野口 辰太郎
（2010年 法経学部法学科 卒業）
（2012年 専門法務研究科 修了）

2025年12月6日、京成ホテルミラマーレ2階「ディスカーロ」において、「令和7年度司法試験合格者祝賀会」が開催されました。

合格された皆様、本当におめでとうございます！

私が司法試験を受験していたころから10年以上が経過し、法科大学院や司法試験を取り巻く環境も当時と現在では大きく変化しています。法科大学院の受験者数、司法試験の受験者数はいずれも大きく減少し、法科大学院の募集停止が増え、反対に少数勢力だった予備試験経由の受験者数・合格者数は増加しました。制度的にも、直近では、令和5年度の司法試験から法科大学院に在籍者にも受験資格が認められ、来年度（令和8年度）からはCBT方式（PCによる答案作成）に変更が予定されています。実務的には手書きで文書を作成する機会はないためCBT方式の方が実務に繋がる能力だと思いますが、これまでは手書きでの答案作成を練習してきた受験生からすると非常に大きな変更だと考えられます。

このような変化の中で今年度の司法試験の結果となりますが、全受験者数4,074名、全合格者数1,581名（合格率34.26%）、そして、我らが千葉大学専門法務研究科は受験者数54名、合格者数16名（合格率29.63%）でした。昨年度が合格者11名、合格率21.15%だったことからすると、いずれも大きく数字を伸ばし、近年で一番良い結果と言えるでしょう。

合格祝賀会においてもこのような状況が色濃く出て、合格者だけでなく、教員や実務家の方々など出席者は祝福ムード一色でした。合格順位も良い人が多いとの情報もあり、千葉大学が実力のある受験生を送り出せていることが伺え、来年度以降も好調を維持し、より良い結果を出してくれるのではないかと楽しみでなりません。

また、合格者全員からそれぞれ挨拶がありました。印象としては、在籍中の受験者の合格率が良かったこともあり（受験者8名中6名が合格）、全体的にフレッシュに感じました。他方で、子育てと司法受験の「二刀流」を成功させた方もいらっしゃるなど千葉大学らしさを感じました。

なお、個人的には、学部・ロースクール共に千葉大学という私と同じ経歴の合格者が何人もいたことが妙に嬉しく、一方的に親近感が湧いてしまい、一部の方に挨拶させていただきました。ただ、全員とお話しする機会はなかったため、この場を借りて、合格者の皆さんに向けて、メッセージを送らせていただければと思います。

法曹の世界は終わりのない登山のようなものだと、私は思っています。頂上のようなゴール

はなく、自分で引退するまで続きます。努力と体力がなければ山に登る（＝能力を磨く）ことができません。登れないと現状維持になりますが、後から来た人にどんどん抜かされて、時代遅れになります。油断したり体力がなくなれば現状に留まることすらできず転落してしまうこともあります。自分が今どのあたりを登っているのか、即ち自分の客観的な評価や位置が自分自身では分かりにくいという恐ろしさもあります。もちろん、決して悪いことだけではありません。どの山（分野、職業等）を選択するか、どのような登り方（働き方）は選択するか、目の前の崖（依頼や業務）をどう攻略するかなど大きな自由があります。私自身、この自由を実感できたのは弁護士5年目くらいでしたが、この自由はかけがえのないものだと思います。今後、この自由を最大限生かして、合格者の皆さんが各々の理想の自己実現を果たし、活躍することを祈っています。

最後に、少し私自身の話をさせていただきますと、千葉大学には、大学受験の際はあわや浪人というところを後期入試で拾ってもらい、ロースクール入試の際も補欠合格からの繰上合格と再度拾ってもらいました。そして、ロースクール入学後も司法試験を3回目で合格するまで自習室を使わせていただくなど、学部に入学してから司法試験に合格するまで9年近くも千葉大学にお世話になりました。

このように、千葉大学には足を向けて寝られない立場にありながら、今回、自身が合格した時以来の11年ぶり？に合格祝賀会に出席させていただきました。皆様からは薄情だお叱りを受けるかもしれませんが、私なりに千葉大学には愛着があり、司法試験の結果については毎年確認していました。結果が芳しくないときもありましたが、近年では一番良い結果が出た年度の合格祝賀会に出席できたことは、大変嬉しく、かつ、誇らしく思っています。

これまで、業務が忙しいことを口実に母校に恩返しをすることができておりませんでしたが、今後は何らかの形で少しずつ返していければと思います。

2025年度（4/2以降）に採用された教員

研究部門	教員名	着任年月
法学研究部門	小島 庸輔（こじま ようすけ）准教授	2025年10月
経済学研究部門	萩原 玲於奈（はぎわら れおな）准教授	2025年10月

2025年度末に退職した教員

研究部門	教員名	担当講義※
法学研究部門	下井 康史（しもい やすし）教授	応用行政法

※シラバス検索システムによる

千葉大学の１年

2025年4月　肝臓病の新たな治療標的を発見

2025年6月　メタボリックシンドロームとロコモの関連を解明

2025年8月　南極IceCube観測装置によるニュートリノ研究に貢献

2025年10月　気候変動予測の精度向上につながる水循環解析に成功

2026年1月　衛星データを用いた植物光合成量の観測技術を開発

同窓会役員紹介

会長	渡辺　雅隆	（1982年　人文学部卒）
副会長・理事	吉田　雅一	（1979年　人文学部卒）
理事・顧問	佐藤　栄作	（1988年　法経学部法学科卒）
理事	尾形　健	（1996年　法経学部法学科卒）
理事	櫻田　寛子	（1998年　法経学部経済学科卒）
理事	南　友美子	（2006年　法経学部法学科卒）
理事	永見　慶子	（2007年　法経学部法学科卒）
理事	石見　元太	（2013年　法経学部法学科卒）
理事	橋本　祥一郎	（2020年　法政経学部法政経学科卒）
監事	大久保　壽一	（1979年　人文学部卒）
監事	大勝　健司	（2007年　法経学部経済学科卒）
顧問	金原　恭子	（元法政経学部長）

皆様の「経験談」をお寄せください

同窓会では、会員相互の交流と次世代育成を目的として、卒業生の皆様による寄稿記事を募集しております。

社会の第一線で培われた知見や、これまでの歩みの中で得られた教訓を、ぜひ紙面を通じて共有してください。

●テーマ例：

・キャリア形成における転機や困難を乗り越えた経験談

・専門分野の知見、または人生の節目で感じたこと　など

●対　　象：同窓会員

●形　　式：A4用紙2～3ページ程度（写真・図版の添付も可能です）

寄稿をご検討いただける方は、同窓会事務局まで「氏名・卒業年度・寄稿テーマ（仮）」を添えてご連絡ください。追って事務局より詳細をご案内いたします。

表紙の写真

西千葉キャンパス　かたらいの森と
アカデミック・リンク・センターの様子

1993年 法経学部法学科卒の越川剛様から提供いただきました。

発　行　　千葉大学法政経学部同窓会
〒263-8522　千葉市稲毛区弥生町1-33
E-Mail：chiba.houseikei.dousoukai*gmail.com
*をアットマークに変更